

対象と方法：岩手県国民健康保険診療施設歯科部会が研修受け入れ施設を対象として平成19年3月に実施したアンケート結果をもとに本研修の分析と改善点の抽出を行った。

結果と考察：多くの施設が歯科保健活動，他職種との連携，訪問診療に関連する行動目標を設定した。訪問診療，歯科保健活動はほとんどの施設で実施された。受け入れ側の歯科医師は研修歯科医が研修目標のある程度達成したと考えていた。研修歯科医の態度についてはすべての施設から概ね良好であると評価された。研修歯科医の受け入れが大きな負担となった施設があったことから，今後は研修期間の延長と各施設に適した人数調整等の改善が必要である。また8施設の歯科医師が今後も研修歯科医の受け入れが必要である。今回の研修を通じて歯科保健活動，訪問診療を含む地域医療およびへき地における歯科医療を研修歯科医全員が修得することが可能であった。

結論：1) 多くの研修歯科医が地域歯科保健活動，訪問診療を含む地域医療歯科医療について修得することができた。2) 研修歯科医全員がへき地における歯科医療について経験することができた。3) 訪問診療や地域保健活動の日程を考慮した研修日程の策定が必要である。4) 研修人数，研修期間，管理型臨床研修施設と研修協力施設間の移動ならびに研修協力施設と宿舎との移手段について改善する必要がある。

演題3. ポジティブチェンジに基づいたワークショップによる平成18年度岩手医科大学歯科医師臨床研修の検討

○工藤 義之¹⁾，岸 光男¹⁾，熊谷 啓二¹⁾，
中村 弥栄子¹⁾，柳谷 隆仁¹⁾，遠藤 憲行¹⁾，
金村 清孝¹⁾，古屋 純一²⁾，齋藤 亮¹⁾，
浅川 麻美¹⁾，八木 實¹⁾，佐藤 健一¹⁾，
大平 千之¹⁾，岡田 伸男¹⁾，柴崎 信¹⁾，
星野 正行¹⁾，高谷 直伸¹⁾，古川 良俊¹⁾，
織田 展輔¹⁾，浅野 明子¹⁾，三浦 廣行¹⁾

¹⁾岩手医科大学歯学部総合歯科臨床教育センター，²⁾ 岩手医科大学歯学部歯科補綴学第一講座

目的：岩手医科大学附属病院歯科医療センターでは，全身管理と地域医療を特色とした複合型研修プログラムに沿って平成18年度歯科医師臨床研修を実施した。ワークショップにより本研修プログラムの評価ならび

に改善法を探ることを目的とした。

対象と方法：本院歯科医療センターで歯科医師臨床研修を行った研修歯科医49名および指導歯科医18名が参加のもと「良い点」，「強み」すなわち潜在力を抽出し，それらを活かして組織改善を図る，いわゆるポジティブチェンジに基づいたワークショップを平成19年3月に開催した。ワークショップでは，岩手医科大学歯科医師臨床研修における潜在力の抽出と，その潜在力を活かした改革方略について検討した。

結果と考察：管理型臨床研修施設での研修を主に担当している総合歯科臨床教育センターで平成18年4月から実施している保存，補綴，口腔外科の認定医，専門医，指導医によるグループ医療が岩手医科大学歯科医師臨床研修の潜在力の中心（ポジティブコア）として抽出された。歯科医師臨床研修の改革方略としてグループ医療をさらに充実させることで岩手医科大学歯科医師臨床研修を改善できる可能性が提案された。グループ医療の充実のためには，総合歯科臨床教育センターで採用しているPOS（Problem Oriented System）プロトコルの有効利用による情報共有の強化，ならびにグループにおける指導歯科医の専門分野のバランスを保つ必要があることが示唆された。

演題4. 新たな咬合位を設定した間欠性ロックの一症例

○金村 清孝，田邊 憲昌，藤澤 政紀*，
石橋 寛二

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座

明海大学歯学部機能保存回復学講座歯科補綴学分野*

緒言：長期にわたる間欠性ロックを呈した症例に対して咬合的アプローチによる治療を行い，良好な経過を得たので報告する。

症例概要：患者は34歳 男性（平成15年9月6日初診）。口が開きにくいことを主訴に来院した。7～8年前，ひっかかったように口が開かなくなるという初発症状に対し，左側顎関節部を手指で圧迫することで自力ロック解除が可能であることに気付いたという。半年前からロックが頻発するようになり盛岡市内病院歯科を受診。スプリント療法を行なうも改善せず，当科を紹介受診となった。下顎の外傷等の既往はない。開口量はロック解除前10mm 解除後45mmであった。

治療経過：初診時MRIで右側に関節円板の転位は認